

事項	穂ばらみ期が低温で登熟期間が高温となった場合の刈取時期は通常年よりかなり早まる		
ねらい	<p>平成17年から19年は気象の変動が大きく、平成17年は登熟期間が高温に経過し、平成18年及び19年は穂ばらみ期間が低温で、登熟期間がかなり高温に経過し、玄米品質が低下した。</p> <p>過去3年間の作況試験などから、刈取時期に関する知見が得られたので、県産米の高品質安定生産に資するため、参考に供する。</p>		
指導参考内容	<p>1 穂ばらみ期の低温、登熟期間の高温が及ぼした稲体の特徴等 穂ばらみ期が低温で登熟期間が高温となった場合は、籾殻の小型化や籾の退化及び不稔発生による稔実籾数の減少などから、通常年の刈取時期では玄米品質の低下が顕著で、刈取時期がかなり早まる。</p> <p>2 平成17～19年の気温が稲体に与えた影響等</p> <p>(1) 気象条件</p> <p>ア 平成17年 穂ばらみ期は概ね平年並みに経過し、登熟期間は平年より高めに経過した。</p> <p>イ 平成18年及び19年 穂ばらみ期は平年より低く経過し、登熟期間は平年よりかなり高く経過した。</p> <p>(2) 玄米品質の特徴及び推移</p> <p>ア 平成17年</p> <p>(7) 青未熟粒歩合は、出穂後積算気温約850℃で10%以下となった。</p> <p>(イ) 登熟歩合及び整粒歩合は、出穂後積算気温900℃程度でピーク(80%程度)に到達した。以降、その他未熟粒及び白未熟粒歩合は緩やかに増加し、玄米品質は低下した。</p> <p>(ウ) これらからみた刈取適期は、通常年より、始期・終期が3日程度早かった。</p> <p>イ 平成18年及び19年</p> <p>(7) 平成17年より籾殻が小さく、玄米千粒重が軽く、玄米品質は充実不足により低下した。</p> <p>(イ) 青未熟粒歩合は、通常年よりかなり早く低下し、出穂後積算気温700～750℃で10%以下となった。</p> <p>(ウ) 稔実籾の登熟歩合は、出穂後積算気温600～700℃で80%に到達した。</p> <p>(エ) 整粒歩合は、出穂後積算気温750～800℃でピーク(70～80%)に到達した。以降、その他未熟粒及び白未熟粒歩合が急増し、整粒歩合は1000℃程度で70%以下となった。</p> <p>(オ) これらからみた刈取適期は、通常年より、始期・終期が10日程度早かった。</p>		
期待される効果	県産米の高品質安定生産のための資料となる。		
利用上の注意事項	<p>1 内容は藤坂稲作研究部の「まっしぐら」を用い解析したものである。</p> <p>2 主に解析に用いた作況圃場の㎡当り籾数は、平成17年が4.2万粒(稔実籾数4.0万粒)、平成18年が3.1万粒(〃 2.9万粒)、平成19年が3.3万粒(〃 2.6万粒)で、不稔は平成17年が2.8%、平成18年が6.0%、平成19年が20.1%発生している。</p> <p>3 玄米品質は、品質判定機「RGQI120」を用いた結果である。</p>		
担当部署(担当者名)	青森県農林総合研究センター 藤坂稲作研究部 (工藤予志夫、森山茂治、木村利行)	対象地域	県下全域
発表文献等	平成17～19年度 青森県農林総合研究センター試験成績概要集		

【根拠となった主要な試験結果】

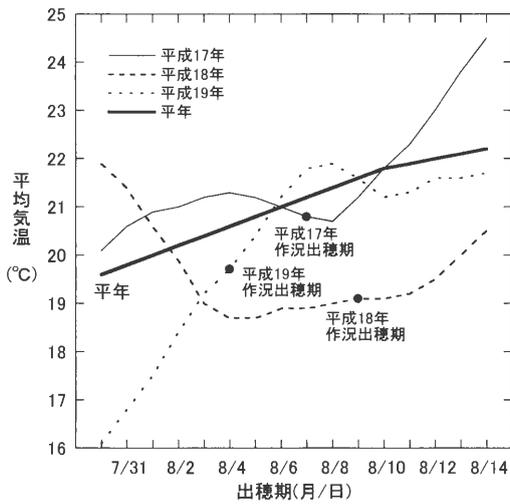


図1 出穂前19～10日の平均気温の推移
(平成17～19年 青森農林総研藤坂)

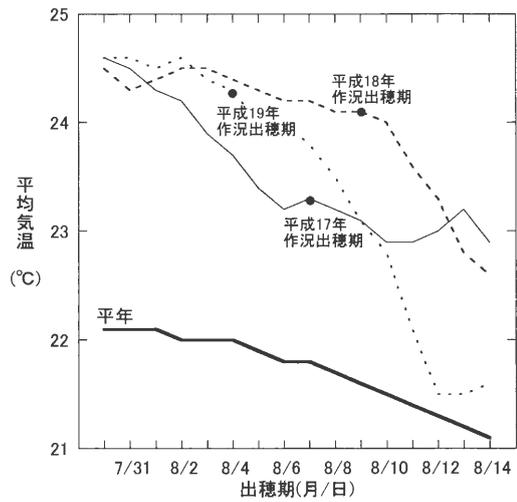


図2 出穂後5～20日の平均気温の推移
(平成17～19年 青森農林総研藤坂)

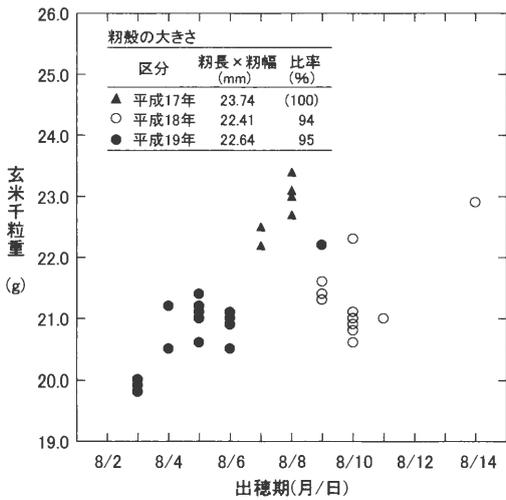


図3 「まっしぐら」の出穂期と玄米千粒重
(平成17～19年 青森農林総研藤坂)
(注) 調査場所: 藤坂稲作研究部圃場

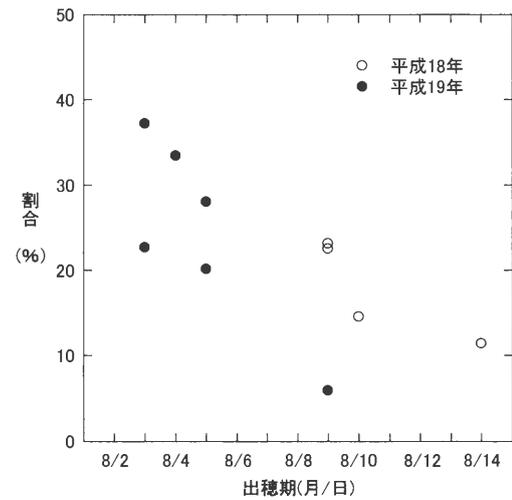


図4 「まっしぐら」の出穂期とその他未熟粒割合
(平成18～19年 青森農林総研藤坂)
(注) 1 調査場所: 藤坂稲作研究部圃場
2 その他未熟粒(充実不足): 扁平、縦溝が深い、皮厚等

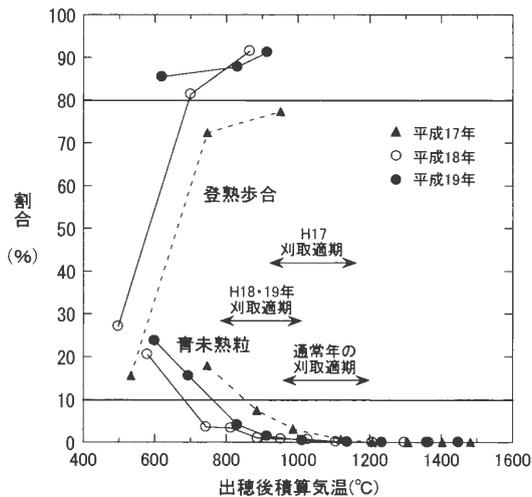


図5 「まっしぐら」の出穂後積算気温と登熟歩合及び青未熟粒歩合の推移(平成17～19年 青森農林総研藤坂)
(注) 1 調査場所: 藤坂稲作研究部圃場
2 平成18～19年の登熟歩合は不稔粒を除いて算出
3 品質は1.9mmにて選別した玄米を用いて調査

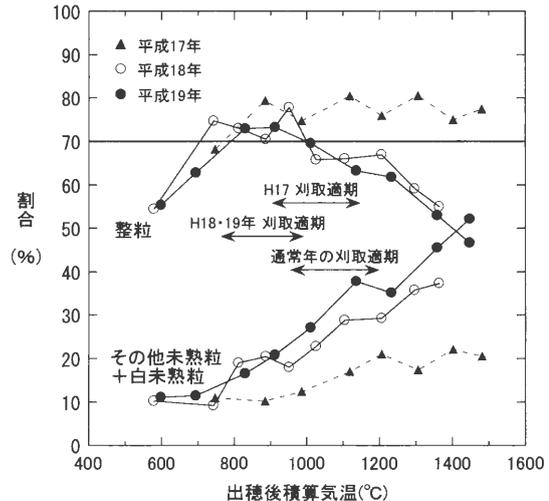


図6 「まっしぐら」の出穂後積算気温と整粒歩合及びその他未熟粒歩合+白未熟粒歩合の推移(平成17～19年 青森農林総研藤坂)
(注) 1 調査場所: 藤坂稲作研究部圃場
2 品質は1.9mmにて選別した玄米を用いて調査